

～昭和30年代の河内山本・天台院周辺のようす～

1 天台院

：住職は照れ臭いので頭を撫でて庭の方を見た。名も知れぬ小禽が春日燈籠の上にとまって、チ、チ、チと啼いている。秋だけた庭は柿落葉が散りしいて掃いても掃いてもうず高いのだ、落葉焚く季節ともなれば、生駒山系は山巒までくつきりと見えて、その山から飛んでくる百舌鳥が天台院の庭の柿を啄みに来るのだ。殺生禁断の五十坪の庭だと知っているのだろうか…

(巻之二所収 「真言秘密の法」より)



撮影：田中幸太郎

天台院前

3 八坂神社(祇園さん)

：僕は八坂の境内で太鼓をもんでいるのを楽しく眺めた。

蒲団太鼓につるした紅提灯が揺れながら、裸の若い衆が百人あまりも汗だくになつてかいているのを見てみると、いかにも夏祭りらしい気分がしてくる。蒲団を太鼓台にのせるといふ風習は、恐らく河内平野で棉を作っていた名残りであろうか。棉の豊作を祈念する形が蒲団太鼓となつて今に名残りをとどめているのかも知れない。

僕の姿を見つけると青年等は手を取り尻を押して、太鼓かきに引つ張りだした。僕は一応は「止せよ。止せよ」などと言いつつながら断わっていたが、実は一年に一度、太鼓かきをしないと祭りのような気がしないし、河内音頭と盆踊りしないと夏のような気がしないのだ…

(巻之一所収 「河内音頭」より)



撮影：田中幸太郎

八坂神社

10 河内山本駅

：その日の午後、一行は中山七里を見物して汽車に乗った。乗ってみれば来た時と同じく、冷酒のぐい呑み、着く駅ごとに汽車弁当を買うたり、滅茶苦茶に酩酊して仕舞った。それでも河内山本駅は乗り越すほどでなかったから、生酔い本性に違わずである。

「とつとつ着いたぜ」

組合長は相変わらず泥のように酔うていながら、それでも生れた土地の匂いはわかるとみえて、張りつめた気がゆるんだように言った…

(巻之一所収 「下根性」より)



近鉄 河内山本駅

13 御野県主神社

：この書齋は山本も真中ぐらいのところまで、浅吉親分が探して来た家だった。二階の書齋からは生駒山系が一望のもとに眺められ、七年振りに漸く河内の風景を見られる家に住むことが出来るようになった。読書に飽きると杖を曳いて散歩したが、あまり人にも行き会わぬ閑散な住宅地で、人それぞれに住みなしている心憎いばかりの邸宅を見て廻るのも気持ちよかつた。少し北の方に歩みをすすめると、こんもりとした森があり、本殿、拝殿など形のごとく整っているが、社務所らしい建物は雨戸が閉つて人の気配もない。鳥居の扁額を見ると御野県主神社と読まれた。人氣のない社の境内は雑草が雑々と生え繁り、その雑草の間に小さな摂社の祠が建ち並んでいる…

(巻之二所収 「狐物語」より)



闘鶏場

撮影：田中幸太郎

2 闘鶏場

：土俵の傍では今日の花形である鶏結びの倉平爺さんが焚火に股をあぶりながら、相好を崩して皆の雑談に耳を傾けている。彼等の話の大部分は今日の番附に出る重鶏の噂だった。風を避けた日当りに二三十以上の鳥籠が並び、その一つ一つに張り切った軍鶏が入れている。客の何人かは鳥籠に鼻を押しつけんばかりにして軍鶏を鑑賞していた。勝負は既にはじまっているとみえ、森閑とひそまり返り、じつと息をつめていく気配だった…

(巻之一所収 「闘鶏」より)

8 山本橋

：玉串川にかかっている山本橋の袂に、毎晩、夜泣きうどんが出る。或る晩、刷子用の豚毛ブローカーの芳やんが遅く大阪から帰って来て、夜食代りにうどんを食べていると、あの女が鍋焼きうどん二つを注文して帰った。(はあて。二つ注文しよつたが、さてはレコが来とるな)と勤づいた。この辺の土地の言葉で「考える」というのがある。もちろん考えることから出た意味だが、こつそり覗くことまでも考える範疇に入っているのだ。そこで芳やんは鍋焼きうどん二つの行方を突きとめるために考えた…

(巻之一所収 「河内勘定」より)

12 村有墓地(中野・山本共同墓地)

：「まあ。こんなところに」  
お久は声を出して独り言をいった。ほん直ぐ斜め向かいに安やんの墓が苔むして、しかも少しく傾いて立っている。  
「まあ。つい御近所だんな言つてはるやろ。これがわてのお父うかいな」  
お久は安やんの貧弱な石塔を眺めた。脆い和泉石のために方々が欠けて、かえってざんぐりとした味になっている。お久は誰も参つて呉れそうもない安やんの墓の夏草をも引き抜いた。そしてお母んの墓に供えた線香を半分にとると、残りの半分を安やんに供えるのであった…

(巻之一所収 「河内の顔」より)

14 銭湯

：「そうか。勤めにもいかんと、屋風呂に入つてようでは、どうせ碌な奴やないな」  
「やい。われ。飛んだこと言な。この辺に居る奴は、大概、屋風呂に入つとんで。屋間から銭湯に入れる身分を、けなかりよる奴かて居るんや。あんまり碌でもない奴など人聞きの悪いこと言つてくれるな」  
村の動静は屋風呂からわかると言われるほどなので、この女の表も裏も吟味されて噂になった。村の女どもも以後この女に注意するようになって、わざわざ屋風呂にやってくる女が正体を突きとめようという篤志家もあつた…

(巻之一所収 「河内勘定」より)



銭湯前の通りの風景

撮影：田中幸太郎



50M

国土地理院空中写真 (昭和36年撮影)

※地名は小説中での表記を引用しています。